葉桜

大森　海太

今年は三月に入って寒かったせいか、桜の開花が例年に比べて遅かった。

四月上旬ある日、合羽橋道具街の帰り道、上野の山にさしかかったところ桜はほぼ満開。その日は今にも雨が降り出しそうな肌寒い日だったが、驚いたことに人また人でまっすぐ歩くことも難しいくらい。自撮りスマホで写真を撮るギャルたち、何やらおしゃべりに夢中なオバサンたち、インバウンドの外人観光客も目につく。なかにはブルーシートを敷いて盛り上がっている一団もある。

何もここまで来なくても、街を歩けばどこにでも桜は咲いているというのに、花見という行事は日本人にとって、染みついたものなのだろうか。若いころ会社の連中と夜桜見物に出かけたが、寒くて早く飲み屋に行きたいと思ったのを覚えている。

次の週はホームコースでのゴルフ。すっかり暖かくなってコースのあちこちには桜が満開、スコアを除けば気持ちのよい一日だった。

六番、打ち下ろしのロングホールは、一年中でこの時期しか使わない、桜の花に囲まれたティーグラウンドからだ。

前の組が進むのを待つあいだ、なにげなく目の前にたれさがった枝先を見ると、いっぱいに咲いた花のあいだから若緑色の芽がちょこっとのぞいているではありませんか。

なるほど、そうか。冬の枯れ枝の先につぼみが顔を出し、やがて花が開いていちめんを埋め尽くす。そしてそのあいだから葉芽が出て花を散らし、葉桜となって新緑の季節を迎える。あたりまえのことだが、その変化の先端を目の前で手に取るように見るのは、恥ずかしながらこの齢（とし）になって初めてだった。

そんなことがあってから、散歩のたびに近所の寺や公園の桜をながめていると、日を追うごとにうすいピンクの花から緑の葉桜にかわっていくグラデーションが面白い。桜にもいろんな楽しみ方があるだろうが、この時期の葉桜を愛でるのもまたいいものじゃないか（真夏になると毛虫がついてイヤだけど）。いくつになっても新しい発見はあるものだ。